

障害者の権利を守り、発達を保障するために

みんなのねがい

3

2025
No.713



特集

わたしの学びの場

すべての子どもの発達が保障される

“場”の整備と創造を 児嶋芳郎

連載

発達を見る眼をゆたかに、おおらかに
私に人生と言えるものがあるなら

寺川志奈子

原田文孝

みんなの ねがい

2025年3月号
No.713

- 1 人として 今井彰人
- 2 【インタビュー】いまを語りあう 永井玲衣
- 4 はじめの一步～障害のある人を理解する 吉留英雄
- 6 人生苦あり笑いあり 秋保喜美子
- 7 心に種をまく 安田菜津紀
- 8 この子と歩む 島田和子
- 11 進め！ 推し活道 伊藤伸矢

特集 わたしの学びの場

- 13 わが子が学ぶ学びの場への思い 榮 幸世
- 14 病弱支援学校で学ぶ子どもたち 金澤園子
- 16 離島に、小規模特別支援学校分教室設置を 野津 保
- 18 仲間とともによくわかる楽しい授業を 金坂美穂
- 20 フリースクールの学びの多様性 平野和弘
- 22 すべての子どもの発達が保障される“場”の整備と創造を 児嶋芳郎

- 25 【マンガ】のんびり ぼちぼち 池添鉄平・ナガノテツコ
- 26 私ときょうだい 竹田裕靖
- 28 発達を見る眼をゆたかに、おおらかに 寺川志奈子
- 32 私に人生と言えるものがあるなら 原田文孝
- 36 シリーズ 保育の現場から 山本いつみ
- 38 実践にいかす障害と発達 安藤佳珠子
- 40 ニュースナビ 障害児通所支援利用者負担有料化反対運動 鮫島梨紗
- 42 実践の魅力 川野美幸
- 45 あそぼう、つくろう 長谷川聡一朗
- 46 みんなのひろば
- 48 BOOK／編集後記



デザイン・イラスト

うじたなおき、勝倉大和、ちばかおり
永野徹子、橋野桃子、山内若菜

表紙のことば

地元の川べりに座り、彼女たちは恋話でもしていたのだろうか。声をかけカメラを向けると「ええーめっちゃ寝巻きだしー」と照れながらも嬉しそうにくつつ姿が愛おしい。飾らない表情と普段どおりの風景。何気ない日々のなかの1コマがきらきとした青春の1ページをつくっていく。こんな一期一会の出会いだからこそ、垣間見えるものが胸に沁みる。寒くて長い冬からようやく春へと近づくこの季節。菜の花の花言葉は「小さな幸せ」。僕は、これからも市井の人々を撮り続けていこうと思う。



表紙=土佐和史

とさ かずふみ／写真家。1977年大阪府生まれ。全国各地に出向き、旅ゆく道で出会ったひとや風景を撮り続け作品発表を行っている。2018年に写真集出版レーベルBUFFALO PRESSを立ち上げる。写真集に、「SUNLIGHT MEMORIES」(CITYRAT press)「北関東」[路地裏に咲いた花] (いすれもBUFFALO PRESS) がある。

はじめの一步

障害のある人を理解する



最終回

社会の主人公として



全障研大阪支部

吉留英雄

よしとめ ひでお / 1962年生まれ。社会福祉法人わかさ福祉社会ひむろ作業所所長。長年成人期障害福祉分野で勤務。きょうざれん大阪支部副支部長、全障研大会分科会「働く」共同研究者。広島大学大学院修了、教育学修士（障害児教育実践史専攻）。社会福祉士、精神保健福祉士。『憲法にいちばん近いところ』（きょうざれん大阪支部ニュース）など執筆

手を離す

ちょうど一年前の年度はじまり、作業所の職員に「今年は手を離す」をテーマにしようとして提案しました。送迎の車両が到着すると職員は車両に乗り込み、仲間の手をとって部屋に連れていきます。しかし、そうやって仲間が施設に入り着席するということは効率的で安全ですけれど、仲間のペースを考えた時それはいいことなのか疑問に思っていたからです。職員に引張られてでは、作業所に到着し、連絡袋をだして、カバンをロッカーに入れてという一連の行為を自分なりに刻むことはできないでしょう。あわてなくともゆとりの中にその仲間らしい個人的な物語ができるのではと。手が離れているからこそ間が入ります。時には間にモノや人が入ることもあります。そういう離れている関係の中でこそ、コミュニケーションが生まれるのです。

日頃から気になっているのが、障害をもつ人が道を外れることが許されない「支援」がはびこっているのではと。仲間たちは寄り道や間違えたりする権利をもっているよねと。ところが「強度行動障害」のある仲間について、これをした

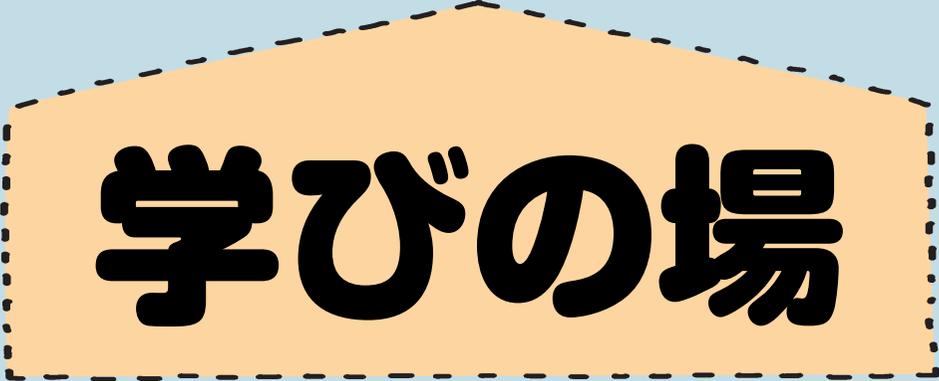
特 集

わたしの

障害のある子どもたちの実態や、抱えている状況や環境はそれぞれで、同様に学びの場のあり方も、子ども一人ひとりに応じてつくられていくのが理想です。

でも、現実はどうでしょうか。それぞれの学びの場で、授業がわからない、登校がむずかしい、居場所をみいだせないなど、苦しんでいる子どもは多いことでしょう。通常学級で「困った子」とみなされ、学校が安心して学ぶ場になっていないケースも少なくないと思われます。また、それぞれの学びの場の教育内容や、体制などの乏しさも、子どもたちの学びに大きく影響しているにちがいありません。

本特集では、さまざまな学びの場からの報告をもとに、子どもたち一人ひとりにあったゆたかな学びの場や、子どものねがいに応える学びのあり方を一緒に考えていきたいと思います。



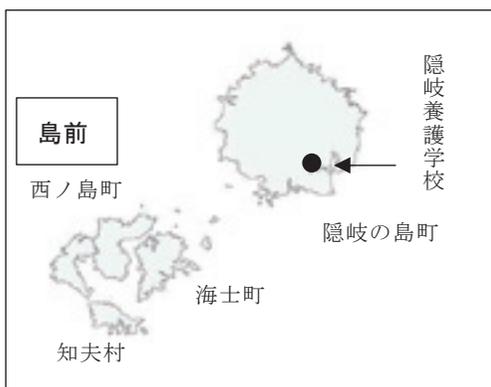
学びの場

離島に、小規模特別支援学校 分教室設置を

島根県隠岐の島 野津 保



後ろに停まっているフェリーで島前に相談に出かける



私の住む隠岐の島は、島根県北方の日本海に位置する4つの有人島からなる諸島です。一番北にある島を「島後」（どうご＝隠岐の島町）、本土に近い3つの島を「島前」（どうぜん＝海士町、西ノ島町、知夫村）といいます。島後に「隠岐養護学校」（1979開校）があります。

島前地区には特別支援学校がなく、中学校知的障害特別支援学級を卒業したら、地元を離れて島後か本土の高等部に行かなくてはなりません。

ある母の思い

島前地区の就学相談で4年ほど向き合

ってきたお母さんが、ある日こう切り出しました。

「わが子が通常の学級で勉強がむずかしいことはよくわかってる。だけど、私はできるだけ、手で育てたい。島でいっしょに暮らしたい。だから地元の高校になんとかもぐり込ませたい。そのために、どんなに勉強がわからなくても、通常の学級にいたことが大事だと思う……」

卒園時から相談を重ねてきましたが、なかなか合意に至らないケースでした。どうして一歩ふみださないのだろうと、もどかしく感じておりました。何年も相談を積み重ねてやっと伝えてもらった本音でした。「なんとか地元の高校に行かせたい」というねがいは、他の町村からも聞こえてきました。島後では、普通高校、水産高校、養護学校があり、その選択肢の中から進路を選ぶことができます。しかし、島前は普通高校1校のみなのです。「進路の選択肢がない」ということが、その苦悩の原点にありました。

町村の集いの中

2021年から島前の各島（町村）を回り、保護者さんたちと対話を重ねてき

【まとめにかえて】

すべての子どもが発達が保障される 場の整備と創造を

立正大学社会福祉学部 児嶋芳郎



「よくし！ やった〜!!」「先生、また明日ね！」

現在の学校では、子どもたちが手応えを感じる学びが保障されているでしょうか。その日の出来事をしみじみと噛みしめ、明日も来たいと思えるところになっているでしょうか。

過大・過密な特別支援学校

特別支援学校では、特別支援教育制度がスタートした2007年度に比べ、2024年度は在籍する子どもが約1.5倍になっています。しかし、学校数は約1.1倍に留まっている、過大・過密化が年々進んでいます。

榮さんは「子どもは設置基準に則った環境で学んでほしい」と訴えています。特別支援学校の設置基準は2023年度から全面的に施行されましたが、既存校には適用されません。過密化によって教室が不足し、文部科学省の調査（2023年10月1日現在）では3359教室も不足しているとき

れています。文部科学省は前回の調査（2021年10月1日現在）から改善していると言いますが、調査結果を詳しく見ると、教室の間仕切りや特別教室の転用など「児童生徒等の増加に伴う一時的な対応をしている教室数」は7476教室もあり、むしろ悪化しています。

教室不足を解消することに留まらず、子どもたちがゆとりと学校生活を送ることができ、教員がさまざまな教育実践を創造できる教育環境の整備が早急に求められます。また、子どもたちがスクールバスに2時間近くも乗車している状況もあり、特別支援学校の地域分散化も課題です。

困難な状況に目を向け

金澤さんや野津さんからは、目を向ける機会が少ない、病弱特別支援学校や離島での障害児教育について報告していただきました。

発達を見る眼をゆたかに、 おおらかに



鳥取大学

寺川志奈子

てらかわ しなこ／鳥取大学地域学部。研究テーマは「子どもの自我、自己、および社会性の発達と教育的支援」について。共著に『自閉症児・発達障害児の教育目標・教育評価1 子どもの「ねがい」と授業づくり』（クリエイツかもがわ) など

最終回

みんなちがって、
みんないい

世界でいちばん幸福な国

最終回は、幾度か学校を訪ねる機会を得た北欧の国フィンランドの教育のお話をしたいと思います。

フィンランドは、国連が2012年から毎年行なっている世界幸福度調査（World Happiness Report）2024においてランキング1位（7年連続）となった国です。高い税金によって社会保障制度が充実していることで知られています。18歳未満の医療費は無償、また就学前教育から大学・大学院までの授業料や義務教育学校の給食費、教材費、通学にかかる交通費もすべて無償です。また2021年には義務教育年限が延長され、すべての若者に18歳になるまでの学びの機会が保障されることとなりました。こうした制度の下では、親の経済格差が教育格差につながることもなく、すべて子どもたちが平等に、安心して学びに向かうことができるでしょう。

フィンランドはPISAと呼ばれるOECD（経済協力開発機構）に加盟する国や地域が参加する国際的な学習到達度調査（2000年から3年毎に15歳を対象に実施）において、PISAが始まった年に1位の成績だったことで、その教育に世界からの注目が集まりました。その後も世界的にみれば常にトップクラスの成績を維持していますが、近年、順位が下がってきています（移民の急増や経済状況の悪化などが影響要因として考えられています）。こうした動向に対してフィンランドのある教師は「私たちは1位を取ろうと思っ

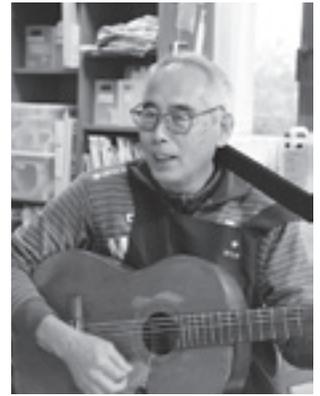


私に

人生と

言えるものが

あるなら



原田文孝

はらだ ふみたか / 1956年岡山県生まれ。兵庫県加古川市で肢体不自由養護学校に31年勤める。教員退職後も障害福祉の職場で障害の重い人たちとかわり続ける。NPO法人ささゆり会代表

最終回 楽器は自ら鳴り響かない

人生の出会い

最後は私の若いころの大失敗の實踐の話をします。戸田君を担任したのは、小学部6年生の時です。戸田君は座位や四つ這いでの移動ができるので、人見知りや場所見知りをして、人とのかわりを避け、一人でカーテンにくるまったり、カーベットのの下にもぐり込んだりしていました。また、聴覚障害があるためか、寝転んで自分の手を見つめて興奮していました。不安が強かったのか、なかなか他者を寄せ付けないので、授業にも参加しにくい状態だったようです。5年生までの担任が一番悩んでいたのが、給食指導でした。給食では、マヨネーズ、シーチキン、牛乳以外はほとんど食べないので、「給食時間は格闘でした」と引き継ぎました。椅子から自分で降りてカーベットの寝転んでしまうので、担任が寝転んでいる戸田君の口に食べ物をほとんど強制的に入れると、戸田君は食べるということの繰り返しだったようです。戸田君にとっても担任にとってもつらい時間になっていたので。

食事指導が始まってすぐ、私は戸田君と「人生の出会い」をしました。ちょう

精神障害のある子ども・若者の理解と支援⑥

葛藤を乗り越え、育ちの中で芽生える「自分らしさ」



日本福祉大学

安藤佳珠子

あんどう かずこ／専門は社会福祉学。ひきこもりやその家族の活動を支援。精神科病院等でソーシャルワーカーとして勤め、現在は日本福祉大学の社会福祉学部社会福祉学科講師。論文「不登校経験があるひきこもりの若者の葛藤する機会を保障するソーシャルワーク：発達集団が生み出す関係性のなかでの自立」等。

この連載も、今回が最終回となりま
す。今回は、精神障害のある子ども・若
者の「育ち」に焦点を当て、その過程を
考えていきます。

居場所から社会へ、Aさんの歩み

開所間もない地域活動支援センターで
は、メンバーの意見をとり入れて家具の
配置をしました。部屋の中には大きな
ソファが置かれ、訪れるメンバーたちが
ゆったりと過ごせる場所になりました。
Aさん（20代、男性）は、調子よく通え
ているかと思えば、突然体調を崩し、地
域活動支援センターに來られなくなるこ
ともありました。Aさんは精神障害を抱
えており、「なぜ自分は通うという簡単
なことすらできないのか」と葛藤し、動
けなくなっていたのです。周囲のスタッ
フは「いつでも来てくれたらいいよ」
と、Aさんの状況をありのまま受け入
れ、承認の態度を示し続けました。
このような日常の積み重ねの中で、A
さんは少しずつ自分の苦しさを周囲に話
せるようになっていきました。さらに、
いつの間にか部屋の中心にあったソファ
がなくなり、代わりにAさんたちが自ら
作業台を搬入するようになりました。彼

らは自分たちのできる範囲で作業をしな
がら、少しずつお金を稼ぐことを目標に
し始めたのです。現在、Aさんは就職
し、自分で生計を立てています。

葛藤は成長の証

「うちの卵」を考えてみよう

子ども・若者が自分らしく育っていく
過程では、「葛藤」がとても重要な役割
を果たします。葛藤と聞くと、苦しいイ
メージがあるかもしれませんが、実は自
分らしさを見つけるための大切なステッ
プなのです。この葛藤のメカニズムを理
解するのに役立つのが、吉川（200
1）が提唱した「こころの卵」という考
え方です（図）。これは、私たちの心を
卵に例えたものです。卵の黄身の部分に
は、生まれたときからもっている「こう
したい！」という欲求（たとえば、「自
由に遊びたい」「好きなものを食べたい」
など）があります。しかし、成長するに
つれて、卵の白身の部分のように、社会
のルールや周りの人からの期待など、外
の世界の規範をだんだんととり入れてい
きます。そうすると、黄身の部分の「欲
求」と白身の部分の「規範」がぶつかり
合い、心の中で葛藤が生まれます。たと



ニュースナビ

News Navi

2025年3月号

障害児通所支援利用者負担無料の 継続を求める運動

子どもの権利として保障されている
鹿児島市の現行制度継続を願って

突如として出てきた有料化問題

「障害児通所支援利用者負担無料の継続を求める会」は、障害児通所支援（児童発達支援、放課後等デイサービス）を利用している鹿児島市の保護者、支援関係者有志により、2024年6月に発足した。その契機は、市の障害児通所支援利用における現行制度見直しの方針が明らかになったためである。

鹿児島市では、障害児通所支援は市の独自助成により利用者負担無料で利用できる。それは、2003年支援費制度導入により、それまで無料であった支援に利用料が発生し、経済的負担から支援を受けられない親子がでてきた際、当時の県内の保護者たち、そして支援関係者が「どの子も安心して支援を受けられるように」と声をあげ続けてきた結果であった。2007年4月より当時市長が「障害のある全ての人が安心してサービスを受けられるために」と『恒久的無料化』を表明し、今日まで17年間続いている。

ある保護者は、「療育を勧められた時は不安いっぱいでした。でも診断がなくても受給者証をとれば療育を受けられる、そして無料で受けられるという鹿児島市の仕組みに背中を押され、支援があるなら私も頑張ってみようと思えた」と話す。“わが子に障害がある

のかも”と自責や葛藤に駆られたり、家族や周囲から理解されず苦しさを秘めている保護者はたくさんいる。しかし無料で利用できることが一歩を踏み出すきっかけとなり、救われた親子もたくさんいると思う。

しかし、2024年、市は障害児通所支援事業所の大幅な増加により、市の事業費負担が増えたことを理由に、独自助成の見直し（すなわち有料化）の検討をしていることが明らかになった。それを耳にした時、周りの保護者や支援関係者は何も知らない人がほとんどであり、「当事者抜きで決められる怖さを感じた」と話す保護者もいた。

この有料化問題とともに、現行制度は全国的にみても数少ない先進的なたとくりみであること、そしてそれは子どもの権利条約に則ったものである、と一人でも多く周知されるため署名活動が始まった。そこには、先輩の保護者たちが声をあげ続け切り開いてきた子育てへの希望の道筋を、未来の親子そして社会のためにつないでいきたいねがいもあった。

つながりの中で広まる運動

6月下旬に始まった署名活動は、人から人へと広まっていった。事業所から保護者へ、保護者から保護者へ、保護者から家族、知り合いへ…学校長に説明し署名の協力をもらった保護者

なかまのねがいを支える

奈良 コミュニティワークこっから 川野美幸



コミュニティワークこっからは、生活介護事業所として2002年4月に奈良市に開所しました。現在、20歳から66歳までの46人のなかまが通所しています。パン工房・豆ふ工房・紙すき班・活動班の4つの班に分かれて活動しています。私は活動班を担当しています。「運ぶ」を仕事にした配達やアルミ缶・段ボール回収と、授産活動の力を育む内職の仕事（鹿せんべいの帯巻）、体力づくりの散歩が活動班の主な日中活動の内容です。

ヘッドフォンがほしい

Yさん（ダウン症）は、特別支援学校の高等部を卒業し、こっからに入所して8年目になる女性です。こっからの生活にすっかりと慣れ、好きななかまや職員がたくさんいます。

私が活動班に配属される前、職員会議などで知るYさんは、職員の指示が入らないことがある、ぷいっと顔を背ける、散歩は好きじゃない様子で道の途中で座り込んでしまつてなかなか動かないという、かわいらしいけどなかなかの「困ったさん」の印象です。

Yさんの横にはそのときどきに担当職員が常について、もしくは担当職員にずつ

とくつついて行動しています。ある日突然、活動班の担当となった私へは全然心を開くことはなく、あいさつは普通に交わし、新メンバーとして迎えてはくれるけど、これまでの仕事のスケジュールを変わらない職員さんと一緒に行う毎日です。一緒に班になったけど、Yさんにどう接したらいいのか、むずかしいと感じていました。

そんなある日の昼休み、欠席しているなかまのNさんのヘッドフォンを使つて、Nさんがやるのと同じようにPCにつないで、音楽を聴いているYさんの姿がありました。Yさんは他の人の物だとわかってはいますが、「かして」となかなか言えません。使つてみたい気持ち、ほしい気持ちがあると勝手に手に取つてしまいます。その姿を見た職員が、その様子を「ほかのなかまの物を勝手に使っているよ」と言うのではなく、次のように私に教えてくれました。

「ヘッドフォンがほしいんじゃない？」
私たちは、勝手に使うのはもちろん「困ったな」と思いますが、同時に「もしかして、なかまはこうしたいんじゃないか」「ほかのなかまもやりたいのではないか」と、なかまがそうする理由を考